

第4章 トータルパッケージを活用した連携の課題

—— 今後の課題と展望 ——

第1節 多様な機関におけるトータルパッケージの活用

障害者職業総合センターでは、障害者に対する評価・支援技法として事務・OA・実務作業からなるワークサンプル幕張版（以下「MWS」という）ならびに情報の整理方法の獲得を目的とした M-メモリーノート等の開発を行った。また、これらの開発物を活用する中で、補完方法やストレス・疲労への対処行動の必要性和、その確立のための効果的な支援方法として「職場適応促進のためのトータルパッケージ」を提唱している。これらの知見から、多様な障害種別への適用可能性が示唆されており、本研究では様々な機関でトータルパッケージの適用可能性について試行・検討を行っている。

そこで今回は、多様な機関におけるトータルパッケージやそのツール群の試行・活用状況について整理し、トータルパッケージを活用した関係機関の連携のあり方について検討する。以下に、各ツール毎の活用事例について示す。

1. M-メモリーノートの活用事例

高次脳機能障害者に対しリハビリテーションを行っている A リハビリテーションセンターでは、M-メモリーノートを、入所者のリハビリテーションの一環として全面的に導入している。早期に M-メモリーノートを導入するため、個々の対象者の状況に応じて、使用する様式の改変等を行う等、対象者に応じた活用方法を工夫している。

高次脳機能障害者を中心に支援を行っている B 福祉施設では、M-メモリーノートを全ての通所者に導入している。導入に際しては、まず意欲的な数名に集中訓練を実施・導入し、他の通所者の関心や意欲を高め、現在では全ての通所者が活用している。この施設では、M-メモリーノートを活用することで、支援者間で支援の統一が図れ、一貫性のある指導が可能となったこと、通所者が自らの課題を M-メモリーノートで自分で確認し報告や改善に努力するようになったこと等により、施設内の支援がスムーズに行われるようになったと報告されている。

また、対象者によっては、家庭や他の支援機関との連絡に M-メモリーノートを活用することで、家族や他の機関の支援者との間で、対象者に対する支援の方法等についての情報共有が図られるようになったと報告されている。

さらに、C 養護学校では、M-メモリーノートを体重や食生活の管理に活用するなど、健康管理の支援ツールとして活用し始めている。

2. MWS の活用事例

現在複数の養護学校が、校内実習や教科学習、自律活動の授業等で、知的障害・発達障害等のある方に対し MWS を中心に活用している。活用している MWS は、実務作業に限られず、OA 作業や事務作業についても導入されている。いずれの養護学校においても、通常の授業とは異なり、将来の職業生活を意識した取り組みを行っているため、生徒の意欲は高く積極的であることが報告されている。

また、これらの作業を在学中に行った生徒の中には、卒業後に生活の安定を図り、継続的に職業リハビリテーションを指向するために MWS を活用している事例も見られている。

高次脳機能障害者を中心に治療や医療リハを行っている D リハビリテーション病院（以下「D 病院」）は、入院・外来患者を対象に MWS を中心として活用している。まず MWS の OA 作業が D 病院職能課・OA 事務訓練コースの作業の一部として導入された。続いて簡易版・訓練版ともに、事務課題 3 種（数値チェック、物品請求書作成、作業日報集計）、実務課題 2 種（ピッキング作業、プラグタッブ組立）が導入された。D 病院では、① MWS 簡易版で基礎的能力チェックを行う、② MWS 訓練版で負荷をかけた訓練を行う、③従来から D 病院で活用している作業へ移行する、である。特に、①と②の作業結果は、作業場面のフィードバックだけではなく、その後の相談や支援に効果的に活用されている。

知的障害・発達障害者を主な対象とした E 作業所では、定期的に行われる入所希望者への作業体験実習で MWS を活用している。この中で、プラグタッブ組立やナプキン折りの一部と数値入力、課題の仕様を変えることなく実施しているが、実務課題のピッキング作業では、指示物品の数を減らすなど障害の個別性に対処するため一部の仕様を変更し活用している。この試行では、MWS の実施により、対象者がより実際の職業に近い作業を体験できただけでなく、各々の対象者の障害特徴がより明らかになったと報告されている。

3. MSFAS の活用事例

精神障害者の支援を行っている F 生活支援センターでは、施設利用者 7 名に対してトータルパッケージを用い、ストレス・疲労への対処行動をセルフマネジメント・スキルとして構築するための支援を行った。試行を行った 4 日間の中で、WCST、M-メモリーノート集中訓練、MSFAS の作成、MWS 簡易版・訓練版を実施するカリキュラムを実施し、休憩を取得しやすい環境を整え、疲労やストレスに対する適切なセルフマネジメントが行えるよう、段階的な支援を行った。この結果、個々人により実施した MWS の課題やレベルに違いはあるものの、ほぼ 100%の正答率で作業結果を出すことができ、かつ、7 名ともに作業能力の維持のために休憩が有効かつ必要であることを理解した。また、7 名全員が半日間の作業と休憩を計画し、ほぼ、その計画に沿って行動できるようになった。

この取り組みの後、C 施設では 7 名や新たに施設を利用し始めた対象者に対して MSFAS を活用した継続的な相談・支援を続けている。

第2節 トータルパッケージを活用した関係機関の連携のあり方

前節で見たように、トータルパッケージに含まれるツール群は、様々な機関でそれぞれの目的に応じて活用され始めている。これらの機関の支援目標の1つは、就職への支援であり、トータルパッケージの活用の実態は、教育や医療、福祉機関の現場で職業リハビリテーションがスタートできることを示している。

そこで、本節では、トータルパッケージを活用し職業リハビリテーションをスタートしたこれらの機関と、既存の職業リハビリテーション機関（以下「職リハ機関」という）との有機的な連携について、トータルパッケージのツール別に検討する。

1. M-メモリーノートの活用による連携

M-メモリーノートは、日常生活や職業生活に必要な情報を整理し、有効に活用できるように支援するためのシステム手帳型のツールである。これらのツールは既に、福祉施設や医療機関等の職業の前段階にある障害者への導入実績がある。これらの機関では、M-メモリーノートを導入し、日常生活面や作業場面での自己管理を支援するだけでなく、家族や他の支援機関との情報共有にも活用し始めている。M-メモリーノートを用いた情報共有は、障害者自身がその情報の運び手となっており、情報共有の過程が障害者本人の了解事項となっているため、複数の機関や支援者が共通のスタンスで支援を行えるようになることが重要なポイントであろう。

今後、このようなM-メモリーノートを活用した情報共有による連携が、既存の職リハ機関を含むようになること、より職業生活に近い場面へとM-メモリーノートの活用を般化させることとなる。この時、職リハ機関には、職場での自立的行動を支えるだけでなく、職場と家庭、様々な支援機関を結ぶツールとして機能するよう支援することが期待される。

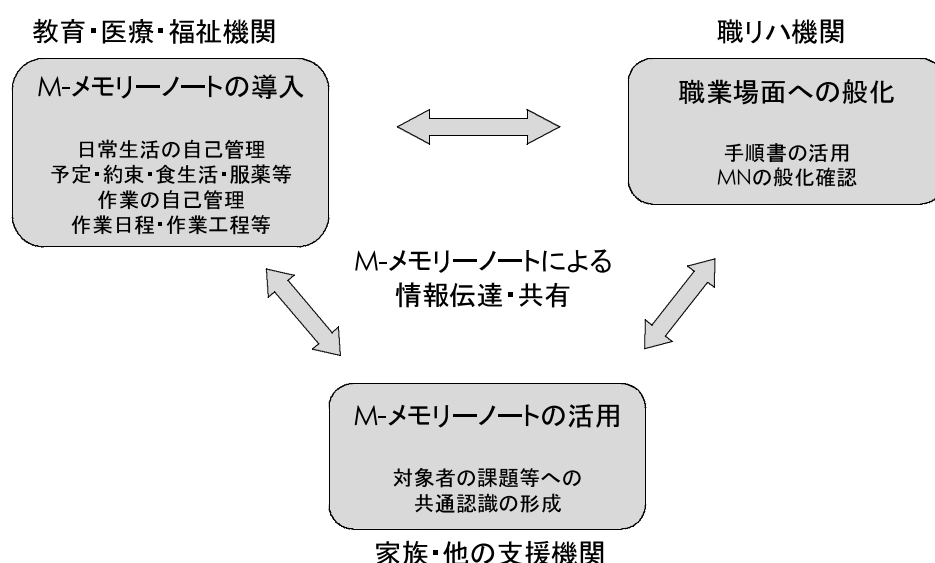


図4-1 M-メモリーノートの活用による連携の模式図

2. MWS の活用による連携

MWS は多くの関係機関で、訓練課題として導入され効果的な活用が図られ始めている。これらの機関で MWS を導入することにより、いわゆる職業前の段階の支援が、教育・福祉・医療の中に取り入れられ、より早期に職業を意識した取り組みが実現可能であることを示している。また、これらの試行では、対象者が抱える職業上の課題を具体的に捉えることにも役立てられている。

このように様々な機関が MWS を活用し職業生活を意識した支援を行うことで、対象者は継続的かつ段階的に、具体的な目標を持って支援を受けることが可能となる。例えば、医療機関で一定の作業遂行能力と補完方法を身につけた後、職リハ機関で職場を意識して負荷をかけて MWS を行ったり、既にな身につけた補完方法等の般化可能性を把握する等の段階を設定できる。

一方で、職場復帰の支援などでは、対象者の障害状況に適した職務内容を、事業所と具体的に検討する際に、MWS の実施結果が役立てられている。このことから、職リハ機関で支援を行う際に、関係機関から MWS を活用した支援の状況が伝達されれば、新たな作業を学習する場合の対象者の特徴を把握することができ、ジョブ・コーチ支援等での具体的な支援方法の検討に役立つ。

さらに、MWS の実施状況を家族や他の支援機関に伝達したり、家庭等の場面で実施できる MWS を活用することで、対象者の職業能力についての共通認識を図ることができ、職業生活を指向しつつ現状のニーズに応じた生活支援を検討したり行うことに役立つと考えられる。

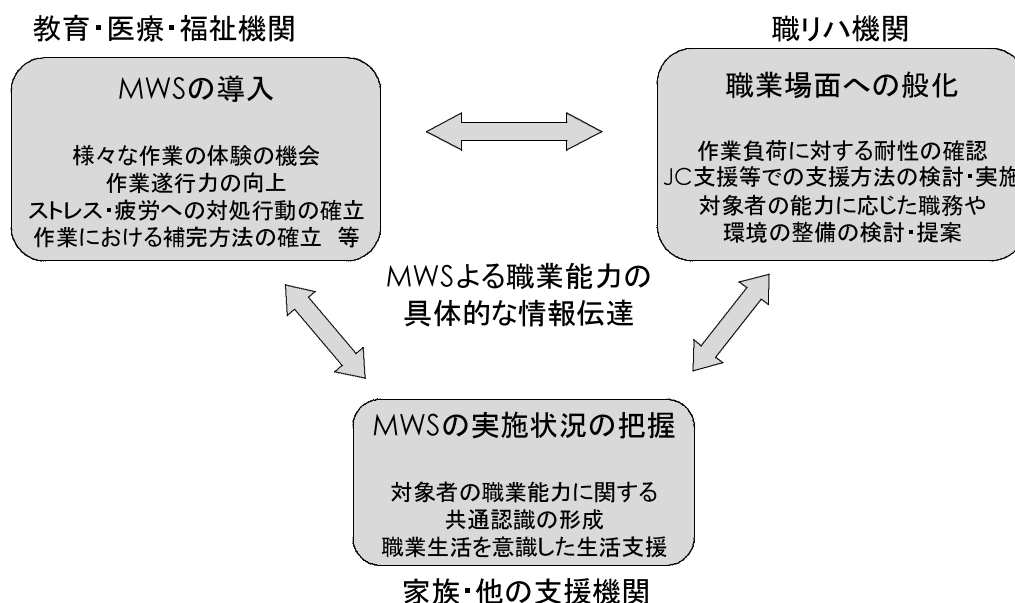


図4-2 MWS の活用による連携の模式図

3. MSFAS の活用による連携

MSFAS は、ストレスや疲労に関連する様々な要因やそれらへの対処行動の現状を整理するための様式群である。MSFAS を活用した関係機関での試行の中では、職業前の支援段階にいる対象者に対しても、ストレス・疲労の現状を整理していくことが、自分自身の障害状況を認識や、対処行動の必要性の確認に役立つことが示唆されている。トータルパッケージではこれらの情報をもとに、ストレス・疲労への望ましい対処行動を確立し、セルフマネージメントスキルの向上を図るよう支援していくが、関係機関が連携することで、これらの成果が、他の関係機関や職リハ機関の利用時に般化できるのかを確認することができる。

特に、職リハ機関では、ストレスや疲労に適切に対処し、自己の作業能力を維持できるセルフマネージメントスキルを実際の職場でも発揮できるよう支援することで、対象者の職場での自律的行動を促進すると共に、職場でナチュラルサポートの確立にも役立つと考えられる。

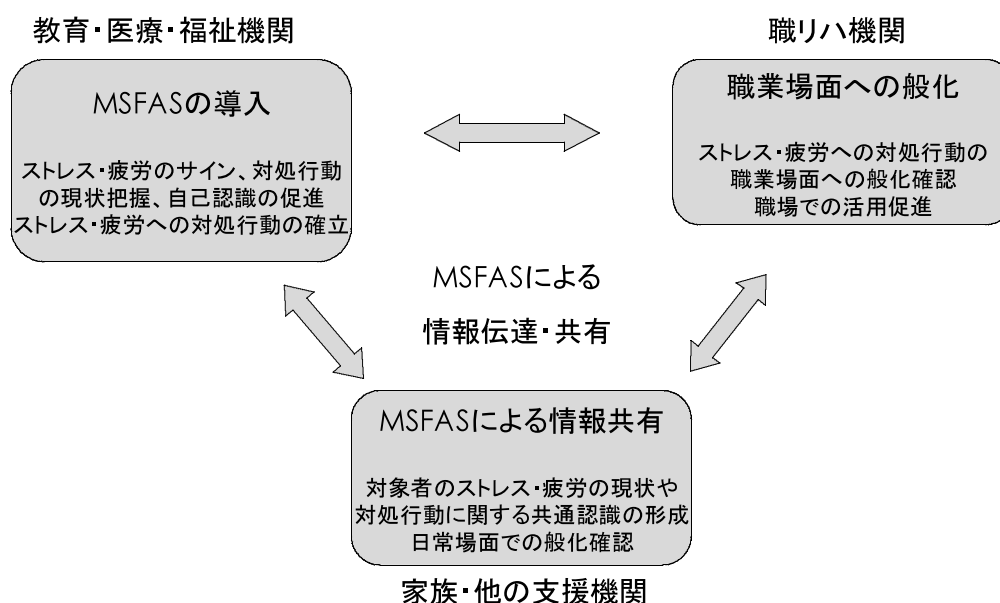


図4-3 MSFAS の活用による連携の模式図

トータルパッケージのツール群は様々な機関で活用されており、導入の方法や効果についても報告が集まり始めている。これらの機関では、職業リハビリテーションを志向しており、今後、地域障害者職業センターをはじめとした職リハ機関と連携する可能性が高い。職業的な自立を1つの目標に、共通のツールを用いて連携して支援を展開する機会が、間近に迫っているように感じられる。

今後は、多くの対象者に多くの機関が職リハサービスを提供するようになるだろう。そのような時代に、系統的な職リハツールとして、トータルパッケージが活用され、有機的な連携が構築されるよう研究を進めることが必要なのではないだろうか。

《参考文献》

- 刎田文記他（2005）.精神障害者に対するトータルパッケージの活用 第13回職リハ研究発表会発表論文集, pp.204-205
- 位上典子他（2005）. 地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用について 第13回職リハ研究発表会発表論文集, pp.112-115
- 池谷祥子他（2006）.障害者小規模授産施設 脳外傷（高次脳機能障害）工房「笑い太鼓」における就労支援への移行を目指した取り組みについて～ M-メモリーノートと M-ワークサンプルの活用について 第14回職リハ研究発表会発表論文集, pp.228-231
- 石原まほろ他（2006）.地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用 第14回職リハ研究発表会発表論文集, pp.232-235
- 伊藤豊他（2005）.高次脳機能障害を持つ方への支援—トータルパッケージの実践を通して— その②— 第13回職リハ研究発表会発表論文集, pp.276-279
- 泉忠彦他（2005）.高次脳機能障害を持つ方への支援—トータルパッケージの実践を通して— 第13回職リハ研究発表会発表論文集, pp.212-213
- 木村彰孝他（2005）.養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望—特別支援教育における一人一人の教育的ニーズに応じた対応を目指して— 第13回職リハ研究発表会発表論文集, pp.208-211
- 木村彰孝他（2006）.養護学校におけるトータル養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望（2）～教育現場における活用可能性を探る～ 第34回職業リハビリテーション学会発表論文集, pp.102-103
- 木村彰孝他（2006）.養護学校におけるトータル養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望（3）～ホームワーク版を含めた活用の実際～ 第14回職リハ研究発表会発表論文集, pp.236-239
- 小池磨美他（2006）.精神障害者の就労支援におけるトータルパッケージの活用について 第14回職リハ研究発表会発表論文集, pp.224-227
- 佐藤修子他（2005）.精神障害者社会復帰施設での就労支援におけるトータルパッケージの活用と展望—対処行動獲得にむけて— 第13回職リハ研究発表会発表論文集, pp.206-207
- 障害者職業総合センター（2004）. 調査研究報告書 No.57 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（最終報告書）
- 障害者職業総合センター（2004）. 調査研究報告書 No.64 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（活用編）
- 戸田ルナ他（2005）. 家族支援に関するニーズ調査—地域・広域障害者職業センターを対象とした調査と家族会等へのヒアリングから— 第13回職リハ研究発表会発表論文集, pp.272-275
- 戸田ルナ他（2005）. 多様な機関におけるトータルパッケージの活用 第34回職業リハビリテーション学会発表論文集, pp.94-95.